

マコガレイ 漁獲増期待

県水産技術センターなど実験

育ったことが実証されたという。同センターや県栽培漁業協会（同市）では約20年前から稚魚の種苗生産・放流を続けており、研究結果が資源回復につながるか期待されている。（鴻谷 創）

稚魚にLED 成長促進

漁獲量が減り続けているマコガレイの成長が、緑色発光ダイオード（LED）の光を稚魚に当てることで促されるとする共同実験結果を、県水産技術センター（三浦市）などが発表した。白熱灯の下で育てた場合に比べ、体重が約1.4倍に

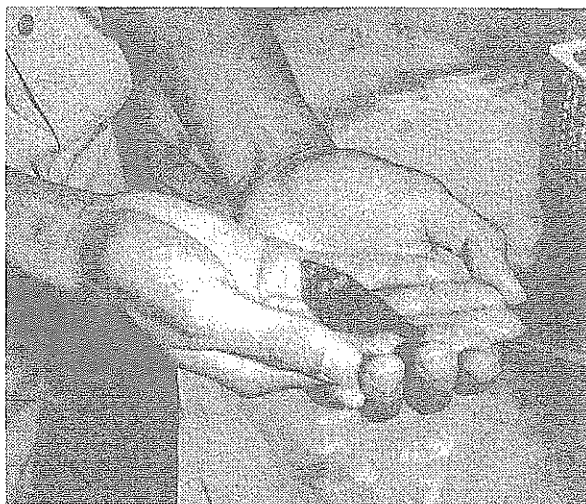
共同実験は同センターと北里大海洋生命科学部魚類分子内分生物学研究室（相模原市）、照明メーカーのスタンレー電気（東京都）で実施。今年3月下旬から4週間、約1500匹のマコガレイの稚魚に、1日9時間半にわたり緑色LEDの光を照らした。白熱灯を照らした稚魚よりも、平均で体長は1.16倍、体重が1.44倍となった。

大きい稚魚ほど逃避能力が高まり、他の魚に食べられるリスクも減るといふ。同センターは「この技術を応用して放流効果を高め、資源回復につなげたい」。本年度中に赤や青色のLEDを使って同様の実験を行い、研究を進めていく。

マコガレイは身に脂が

乗る夏場に旬を迎えたとされる。学名は明治時代の標本の産地が横浜の海だったことにちなみ「ブレウロネクトゥス・ヨコハマエ」。だが同センターによると、主要水揚げ港の一つでもある柴漁港（横浜市）の水揚げは、統計が残る約490ト

（1986年）をピークに減少傾向。2015年は約16トに落ち込んだ。柴漁港の漁獲量は全体的に20～30年前に比べて減っており、漁業者らは近年は養殖や稚魚放流などにも注力している。今回の実験結果に同市漁業協同組合柴支所は「将来的に江戸前のマコガレイがたくさん取れて、港に昔の活気が戻れば」、県内で鮮魚店を営む男性（48）も「夏場のマコガレイは高く、昔から店には出なかった。安価で店頭に並ぶといい話している」。



緑色LEDの光を照らされて成長したマコガレイの稚魚—三浦市三崎町城ヶ島の県水産技術センター